

1. 二 俣 町 の 概 要

鹿 野 勝 彦

- I はじめに
- II 立地と行政
- III 人口の動態と生業
- IV おわりに

I は じ め に

本報告書は、金沢大学文学部文化人類学研究室が、1992年度に3年次学生を主な対象として、金沢市二俣町で行った調査実習に基づいて作成したもので、当研究室の調査実習報告書としては、8冊目のものとなる。¹⁾ 調査実習の目的・方法などについては、従来の調査実習のそれをほぼ踏襲しているので、ここに繰り返すことは避けるが、本報告書でも、以下の各章は実習参加者各自の個別の関心に基いて執筆されているので、全体としては必ずしも二俣について全体的、網羅的記述がなされているわけではない。また、二俣町についてはすでにいくつかの記録や著作が刊行されているが、それらの多くは必ずしも容易に入手しがたい（巻末の参考文献参照）。そこで、この序章では、二俣町の空間的、行政的位置づけ、人口動態と生業などについて若干の記述を行い、集落としての二俣町の特徴を浮かび上がらせることを目的とする。

II 立 地 と 行 政

二俣町は、金沢市東部の医王山に源をもつ田島川と豊吉川が合して森下川となる地点の谷沿いに列村状に形成された、戸数125戸（1992年1月）の集落である。集落の南東には標高939メートルの医王山がそびえ、その山頂から西へのびる尾根はキゴ山、戸室山を経て北へ転じて、田島川と金腐川を分けており、また北へのびる尾根は石川、富山の県境をなしている。おそらく二俣を訪れる者は、誰もがまず、三方を山に囲まれた狭隘な谷底に立地する山村、という印象を持つであろう。もっとも集落を囲む山腹を少し登ってみると、谷底から見上げるのと異なり、意外なほどゆるやかな斜面が随所にあって、そこに田畑が拓かれているのがわかる。とはいえ、集落を取りまく山地の圧倒的な部分は森林である。二俣町から医王山に至る広大な山林が二俣町の惣山、ないしは二俣町民の所有地であることから、²⁾ 二俣町の山村としての性格がうかがわれよう。しかし後述するように、集落としての二俣町はきわめて多様で複雑な性格を備えており、山村、ないし農村的な性格は、その一つの側面でしかない。

二俣町から田島川を上流へ向えば田島町が、また豊吉川を溯れば荒山町、奥新保町、砂子坂町

があり、現在はこれらの集落と、金腐川最上流部に位置する清水町をあわせて、二俣町にある医王山小、中学校の通学区（いわゆる校下）を形成しているが、行政的には、藩政期から1889（明治22）年までは、二俣、奥新保、砂子坂の3集落をあわせて二俣村と称していた。二俣村は1889年に田島、荒山及び戸村清水と南原（あわせて現在の清水町）の各村と合併して医王山村となり、二俣はその大字名となったが、1907年には医王山村が浅川村の一部となり、1957（昭和32）年に浅川村が金沢市に編入されて現在に至っている。旧二俣村の二俣、奥新保、砂子坂は、金沢市への編入の時点で、それぞれに独自の町名をもつ町として分離した。³⁾ 本報告書で、以下に二俣、ないし二俣町というときには、特記しない限り、1957年以降の二俣町を指すものとする。

二俣は、旧二俣村、医王山村では最大の集落であり、村役場をはじめとして、郵便局、警察官の駐在所等がおかれていたし（郵便局、駐在所は現在も存在する）、浅川村成立後も単独の集落としては最大の戸数を擁していて、村に対し強い影響力を有していた。小学校についてもまず二俣に1872年に設立され、ついで荒山、田島にも設立されたが、これらは比較的早期に（1898年までに）二俣のそれに医王山尋常小学校として統合されて、現在の校下が成立している。また、中学校は1947年に、小学校に併設された。⁴⁾ 要するに二俣は、現在の校下を形成する諸集落の、行政の中心地としての性格を、早くから備えていたといつてよい。

現在、二俣への公共交通手段としては、金沢駅から森本を経由して二俣、田島へ至る（一部二俣止まり）JRバスが唯一のものであり、自動車利用者にとってもこのバスの通う森下川沿いの道路が、二俣と外部を結ぶ主要な経路として利用されている。このことは地形的にも当然であるかのように見えるが、実はそれはむしろ比較的最近生じた変化の結果である。すなわち二俣は、かつては金沢と越中を結ぶ交通の要衝であり、藩政期には金沢から大樋へ出、金腐川を溯って夕日寺、小二又経由で二俣へ達し、荒山から越中の小又、坂本を経て福光へ至る道（三ノ坂往来）が、官道として、藩主の往来や物質の輸送に使用されていた。また、二俣一金沢間の往復には、これよりも距離の短かい、金沢から若松、角間、清水経由の道（オコ谷往来）か、田上、新保、清水経由の道（上山往来）が主に用いられ、特に明治中期以降、オコ谷往来は改修が続けられて、1911（明治44）年には県道となっている。

これに対して、現在のバス路線である森本、古屋谷、市ノ瀬、二俣を結ぶ道（市ノ瀬往来）は、かつては二俣一市ノ瀬間の道巾が狭く、勾配も急で、通行量も少なかったという。その本格的改修工事が行なわれて県道となったのも1933（昭和8）年と、かなり後になってからである。しかし1948年に、前述のバス路線が開通したことにより、状況は一変した。一方、かつての三ノ坂往来は、古屋谷から砂子谷を経由して福光へ抜ける国道の開通によって重要性を失った。また上山往来は、一時期（1954～1971）バスが運行されたが、それが廃線となったことにより、オコ谷往来とともにしだいに利用者が少なくなっていった。しかし1970年代後半以降の自家用車の普及により、清水経由の道路は再び重要性をとりもどしつつある。⁵⁾ ここで二俣をめぐる道路の変遷に

ついてやや詳しく述べたのは、二俣が金沢市郊外の山間部の、それもいわば谷奥に近い行きどまりの位置にあるという現状での印象が、歴史的には決して当を得ていないことを示したかったからに他ならない。二俣の占める空間的な位置と、そこを取りまく環境は、時代によってさまざまに異なる意味を持っていたのである。

Ⅲ 人口の動態と生業

二俣の人口と世帯数の変化を、確認しうる資料からまとめると、表一1のようになる。ここで特徴的なのは、言うまでもなく19世紀末から今世紀はじめにかけての、急速で著しい、おそらくこの時期の石川県内でも他にあまり例をみない、世帯数と人口の減少である。ただし、1889年の数値は、奥新保、砂子坂両集落のそれを含んでいるが、これを差しひいても、なお1889年時点で二俣の戸数は約250あったと考えられる。ところで、この時期の人口、世帯数の減少は、実は二俣のみでなく、近接する田島、荒山などにも生じたようである（表一2参照）。

表一1 二俣町の世帯数、人口の変化

年 度	世帯数	人口
1889(明治22)	305	1587
1925(大正14)	152	874
1935(昭和10)	149	797
1960(" 35)	153	852
1965(" 40)	145	755
1970(" 45)	142	701
1975(" 50)	139	659
1980(" 55)	136	629
1990(平成2)	125	565
1992(" 4)	125	610

表一2 田島、荒山の世帯数、人口の変化

年 度	田 島		荒 山	
	世帯数	人口	世帯数	人口
1889(明治22)	166	799	34	181
1960(昭和35)	86	455	13	64
1970(" 45)	75	361	11	56

資料出所

1889 『角川日本地名大辞典17 石川県』
 1925～1990 国勢調査
 1992 町会資料

もっとも、表一1、2に示される数値は、二俣周辺での人口、世帯数の減少が生じた時期やその程度を具体的に特定するにはやや粗にすぎるが、これを補うために医王山小学校の在籍児童数の変遷を見てみると、二俣、田島、荒山の3小学校が統合されて医王山小学校の成立とした1898年から1900年にかけて急激な児童数の減少が見られるのに対し、以後はむしろ増勢に転じている。これには就学率の変動（特に今世紀に入ってからの上昇）といった要因も関係していようが、おそらく多数の人口、世帯の流出は、この地域で19世紀末から今世紀はじめにかけての10年ほどに、かなり集中的におきたと見てよいようである（第6章、表一1参照）。

二俣在住の杉岡家に残されている覚え書きには、1892（明治25）年ごろより二俣から転出した人の氏名166名が記されており、この記録によればその半数（83名）は北海道へ、約20%（33名）が金沢へ、その他に7名が東京、横浜へ、5名が京都、大阪へ転出したとされているが⁶⁾、そのうち北海道への転出者のほとんどは世帯ぐるみの、組織的な移住であったと伝えられる。その他については、移住の形態は不詳だが、大都市圏への転出がかなり多いことが注目されよう。

二俣の人口、世帯数の大巾な減少をもたらした移住をひきおこした要因として、しばしば語られるのは、藩政期以降の二俣の基幹産業ともいべき和紙生産が、藩の保護を失い、かつ、西洋紙の普及に圧迫されて衰退した、という説である。しかし、それはおそらく要因の一つであったにすぎない。なぜなら、この周辺では、同時期に、二俣と同じく和紙生産に従事していた田島のみならず、和紙生産を行っていなかった荒山においても、世帯数や人口は、著しい減少を示しているのである。

この地域での19世紀末から今世紀初めにかけての、特異な世帯数減少の要因については後に検討するが、いずれにせよ、以後、二俣では世帯数は微減、人口は漸減し、世帯の規模は縮小の傾向を続けて、今日に至っている。しかし二俣について見れば、現状での人口の年齢構成、世帯の家族構成は、いわゆる過疎地の特徴である、全体としての人口の著しい高齢化や高齢者の単身、ないし夫婦のみの世帯の高い出現率を示していない（第10章、表—1、2、5参照）ことを確認しておく。

ところで二俣は、以前より「紙漉きの村」として知られてきた。しかし二俣における製紙業の位置づけは、時代によってかなり異なるにせよ、全体としては、むしろ重要な副業とみるのが妥当であるように思われる。⁷⁾ 二俣の生業構造を通時的、総体的に論じることが筆者の能力を超えるが、ここでは二俣及びその周辺の特異な人口動態と、以下で扱われる各章のテーマを考えるための基礎作業として、その変遷についての簡単なスケッチを試みてみたい。

藩政期における二俣の経済は、おそらく農業、林業、製紙業、運送業などの複合によって支えられていたと考えられる。このうち農業は、限られた面積の水田で栽培され、主に貢納にあてられたコメと、後述する製紙原料としてのコウゾを別とすれば、焼畑を含む畑作からの雑穀類が自給作物として重要な役割を果たしていたと考えられる。日本の焼畑については、一般に食糧生産それ自体を目的として行われる場合（甲）と、林業のサイクルの中で造林のかたわら副次的に行われる場合（乙）とがあり、少なくとも今世紀に入ると後者が日本の焼畑の大半を占めていたことが知られている。しかし、森下川流域の焼畑は、1935（昭和10）年の統計においても、面積自体はさして大きいとはいえないが（甲21町歩、乙5町歩）、その80%は当時もお食糧生産を主目的として行われていたのであり⁸⁾、かつてはこの地区での焼畑の重要性は、かなり大きかったに違いない。この焼畑は、集落をとりまく広大な山林において行われていたのであり、そこは林業、すなわち薪炭や用材などの生産の場でもあった。しかし、藩の管理下にあった用材の生産、

管理はいうまでもなく、薪炭の生産も主に自給用である焼畑の農産物と異なり、多分に換金的な性格を有していたはずであり、特に金沢という大消費地を近くに持つこの一帯は、その生産地として有利な条件を備えていたと思われる。ところで、二俣においては藩政期を通じて、地区内の田畑や山林の主要部分を、田畑については5年、山林については20年を1期とし、各々35区画に割って、1期ごとに一定の持分をもつ上層農家に属する籤頭の抽籤によって土地を割りあてるといふ、他にあまり例をみない地割制度を保持していた。その詳細は杉岡長康氏の記載⁹⁾と第2章にゆずるが、ここからは、農業、林業の基盤としての土地に対する、二俣の社会の階層性と共同体的紐帯の強さがうかがわれる。

製紙業については、すでにかなり詳細な記述がなされているので、ここではくり返さないが¹⁰⁾ただ製紙業はコウゾなどをはじめとする原材料の供給から製品の流通、運搬に至るまで、直接の製紙従事者以外の多くの人々をまきこむ形で成立しており、高度に労働集約的な産業であること、その製品の特性から、都市の、それも中流以上の階層との結びつきが強いこと、製紙業者の大多数は直接藩の御料紙を生産していたわけではなく、生産する製品の種類によって、かなり細かく分化していたこと、などを確認しておく。

運送業についてみれば、すでに述べたように二俣は、金沢と越中、とりわけコメの生産地としての砺波平野とを結ぶ交通の要衝だったのであり、二俣が宿駅としての性格をもっていただけでなく、周辺諸集落においても、運送や道路保守のための人夫、駄馬の供給等は、重要な生業の一部だった。

要するに、二俣とその周辺においては、藩政時代からすでに農業、林業、手工業、商業、賃労働など、多様な生業の組み合わせが見られたのであるが、それらの内容の変化や、個々の業種の盛衰は、おそらく藩政期にあっても生じていたであろうし、また世帯レベルにおいても、個々の業種への比重のかけ方は、それぞれに異なっていたであろう。そういった生業の多様さと、集落内での世帯間の生業形態の変異の著しさは、二俣においては、明治以降、今日まで、大きくみれば一貫して引き継がれていく。

農業については、明治以降二俣では、新田開発、用水路建設、耕地整理等が精力的に進められ、一定の成果をあげてきた。1960年の時点でも二俣の世帯の60%以上は、なお専業、一種兼業農家であった（第3章参照）。薪炭生産をはじめとする林業も、やはり少なくとも1960年前後までは、一定の役割を果たし続けていたとみてよい。

製紙業は、時期によってかなりの消長はあるものの、第2次大戦後の1950年代前半まで、なお二俣の重要な生業の一つであったと思われる。すなわち、直接製紙を行っていた世帯数は、1950年当時でも全戸数のおそらく50%以上を占めていたのであり、多少とも紙に関連して収入を得ていた世帯は、さらに多数にのぼっていたはずである。

また、この間、上述の従来からの生業の他にも、二俣では、さまざまな試みがなされている。

たとえば養蚕は1890年前後より1910年代にかけて盛んに行われ、一時は全戸の約3分の1が従事していたといわれるし、これにともなって製糸業も行われていた。アケビ細工も1910年代には十数戸が従事していたし、1920年代から40年代にかけては、漁網製造もかなりの戸数が行っていた。第2次大戦後には、シイタケ栽培、養鶏なども一時期、組織的に行われていた。これらの他にも、近年にいたるまで、二俣で試みられたさまざまな事業は少なくない（第4章参照）。だが、これらの事業がさかんに行われた期間は、いずれの場合もせいぜい十数年から数十年程度で、結局は本格的に定着するに至らなかったといえる。ほぼ同様のことは、採石業、製紐業、タバコ栽培などを生業の中に取り入れてきた田島、荒山、清水などの場合にもいえるようである。¹¹⁾

だが、この地域の経済を支えてきた在来の生業の中で、明治中期以降、完全に重要性を失ってしまったのは、運送業である。すなわち明治以降、三ノ坂往来に代わって森本から清水谷、高窪を経て福光に至る小原谷往来が車道として重用されるようになったこと、さらに1898年に北陸線が開通して、物流のありかたが根本的に変化したことなどが、二俣を金沢と越中を結ぶ交通の要衝から、金沢近郊の、だがその周辺の、山あいの集落へと転化させてしまったのである。こういった二俣の位置の変化がもたらした影響こそが、あるいは1890年代から1900年前後にかけての、二俣のみならず、この地域全体の人口、世帯数の急減の最大の要因であったかもしれない。

もっとも、このような推測は、ここで生じた変化の一面を説明するにすぎない。父祖の地を捨てての移住が組織的に行われたとすれば、他方では、これを積極的に押し進めようとする強力なリーダーシップの存在と、それに呼応した人々をひきつけるだけの積極的な条件があったに違いないのであるが、その間の経緯を推測するための手がかりを、私達はこれまでのところ持っていない。

1960年代後半以降、二俣においては農家の二種兼業化は急速に進み、薪炭生産や製紙業も、数戸が特化して継続しているのを別とすれば、姿を消してゆく過程で、在来の生業はしだいに地域において重要性を失ってゆく。その一方では、交通事情の改善により、二俣は生業面からみれば、金沢への通勤によって得る賃金収入を主とし、農業を従とする二種兼業農家が世帯の大半を占める、いわば平均的な郊外農村としての性格を強めてくる。たしかにシイタケ、ゼンマイ、葉草の栽培や淡水魚の養殖といった山村の独自性を生かした試みや、「紙漉きの里」を前面に押し出した観光化の動きは存在するが、現時点では、それらが二俣の基幹的な生業であるとはいえないし、今後そうなるという確実な展望があるわけでもない。

とはいえ、かつての二俣の多彩な生業のありかたは、行政的な位置づけやその他の要因とともに、現在の二俣の社会組織のありかたにも、一定の関係をもち続けているように思われる。

IV お わ り に

生業面から見れば二俣は、古くより集落の共同体性とその内部での階層性を強く保持した形で営まれてきた農林業と、むしろ金沢という都市をはじめとする集落外とのつながりを前提とした個々の世帯の独立性、主体性に基いて営まれてきた手工業、運送業という、はっきり性格が異なるだけでなく、ときには矛盾しかねない2つの側面をもっていたといえる。個々の世帯も、多くはそれぞれに程度の差はあれ、その双方にかかわりを持ち続けてきた。前者の側面は時代とともにしだいに弱まってきたとはいえ、今日もなお広大な山林が事実上、地区の「惣山」という形で残されていることにうかがえるように、完全に失われたわけではない。しかしその一方で、今日多くみられる、個人や個々の世帯の自由意志によって対等でゆるやかな関係を結び、ないしは組織を作って活動するという形も、ある意味で二俣の伝統にねざしていると言えるであろう。

二俣という集落そのものに焦点をしばってその社会のありかたを見た場合には、以上のような特徴が指摘できるが、目を転じて周辺の諸集落と比較した場合には、さらにまた別の性格が浮かび上がってこよう。本稿、ならびに本報告書では、この点を本格的に論じる用意はないが、二俣は行政的には、かつての医王山村や浅川村の中でも最多の戸数をもつ中心的な集落であったこと、さまざまの面で金沢をはじめとする地域外とのつながりを保持していたこと、などから、近隣の地域においての中心性と、外部への開放性をあわせ備えていたことは、指摘できよう。この点に関連して、本泉寺の存在は、おそらく重要な意味を持っている。二俣の寺院については別項（第11章）にゆずるが、真宗大谷派の古刹として広域に門徒をもつのみでなく、年中行事等には金沢などからも多くの参詣者を集めることにより、二俣を地域の外と結びつけるうえで大きな役割を果たしてきたこと、その一方で、最近まで二俣の地区の事務所、集会所が、ここにおかれていたことなどにも示されるように、集落の求心性を維持する重要な役割をになっていたことは、たしかであろう。

しかし、これらの点を具体的にあきらかにすることは、本稿ではもとより、本報告書全体としても、執筆者、指導者の力不足もあって、なお十分に果たしていない。それらは今後の課題としておきたいが、各位の忌憚のないご指摘、ご批判を頂ければ幸である。

注

- 1) 金沢大学文化人類学研究室がこれまでに刊行した報告書は、以下の通りである。『現代における伝統—加賀友禅の研究』（1983）、『変容する漁村—姫』（1985）、『郊外化する農山村—鍋谷』（1987）、『町野町金蔵—文化人類学の視点から』（1989）、『双子の集落—石川県鳳至郡柳田村、寺分・五郎左衛門分』（1990）、『西二口町と吉原釜屋町—石川県能美郡根上町の2つの集落』（1991）、『鹿島町曾祢』（1992）。
- 2) 杉岡長康『医王山惣山管理申合事項及二俣の土地の仕組』
- 3) 『角川日本地名大辞典17、石川県』789—790。
- 4) 『医王』53—57、116—122。

- 5) 交通についての記述は、主に『医王』155—161による。
- 6) 杉岡長次郎氏（1968年没）作成の「二俣村轉出者名記」による。
- 7) 二俣の製紙については、府和正一郎（昭和52年、特に286—293）参照。
- 8) 農林省 山林局、26。
- 9) 杉岡長康、前掲書。
- 10) 府和正一郎、昭和52年、『医王』89—106など。
- 11) 『医王』第3章参照。